

職業訓練

共同作業から生まれた 「一人前」の基準

日本の農山漁村を調べて歩いた民俗学者、宮本常一氏の著書『庶民の発見』によると、日本の村にはかつて様々な「一人前」が存在していた。「労働における一人前」「技術における一人前」「社会的地位における一人前」「祭祀における一人前」などである。

労働において一人前とみなされるのは、15歳ないし19歳。大工や鍛冶など「手に職」の世界ではおおむね、20歳を過ぎると独立した。一人前のはたらきができれば、ようやく大人と認められる。一人前に満たない者は、村の寄り合いで発言することも許されなかった。

「一人前」の基準は、1日の労働量を目安として考えられていたようだ。寛政年間（1789～1801）の白河藩では、男性なら「田植え 2畝」「田の草取り 6畝」「稲刈り 40束」、女性なら「田の草取り 5畝」「稲刈り 30束」などと定めていた。ではなぜ、ここまで明確な基準が必要であったかと言えば、交換労働を成り立たせるためであったという。

村には、道づくりや溝さらいなど、力を合わせなければできない作業があった。この場合、各自が一人前の作業量をこなせば、「お互いさま」の精神で、無理なく等価交換労働が成り立つ。しかし、各人の能力差が大きく、一人前以下の者が多いと、損する者が多く出て、不平不満が溜まってしまう。

そんなわけで、親は子どもたちが一人前になれるよう、幼い頃から手伝いをさせ、様々なしつけをした。子が一人前でないことは親の恥でもあったから、しつけはとにかく厳しかった。そうした村のしつけは後に、「丁稚奉公」や「徒弟制度」となって、商人・職人の世界へと受け継がれていったのである。

経済的に貧しい村では、若者たちが村の外へ出稼ぎに行くことも多かった。その時の賃金もやはり、一人前が基準となった。また、東京で晴れて一人前となった職人たちの中には、京都や大阪など上方地方へ出向き、有名な師匠の下で新しい技術を身につけた者もいたという。

こうして考えると、村の外に労働市場が成立したのは、村人たちがせっせと一人前の人材を育てていたからだということがわかる。どこかに「育てる人」がいなくては、外部労働市場も成り立たず、経済が発展することもないのだということを、村の歴史は教えてくれる。



Text = 曲沼美恵

フリーライター。1970年生まれ。福島大学教育学部卒業。日本経済新聞社を経て、現在に至る。著書「ニート——フリーターでもなく失業者でもなく」（玄田有史氏との共著、幻冬舎）

Illustration = 下谷二助

参考文献

『庶民の発見』（宮本常一著、講談社）、『日本民衆史6 生業の歴史』（宮本常一著、未来社）